

大学入学共通テストについて

——世界史

濱野 勇介

20 21年1月16日にはじめての大学入学共通テスト世界史Bが実施された。受験生は、対策用の問題集や模擬試験などで準備をしてテストにのぞんだと思う。しかし、2017・18年の試行調査では、従来のセンター試験にはない出題形式の問題が提示されたことから、テスト当日に向けての不安は少なくなかったと思われる。従来にはない出題形式について大学入試センターは、共通テスト作成の基本的な考え方として、「高等学校教育を通じて大学教育の入口段階までにどのような力を身に付けている」^①かをはかるために、「知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力を発揮して解くことが求められる問題を重視する」^②と発表した。また、歴史科目については、「歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視」^③し、「歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する力を求める」^④ことを明確にした。本稿ではこれらの点をふまえて、今回の出題傾向やそこからみえる共通テスト対策に必要な指導の視点について述べていきたい。

① 大学入試センター「令和3年度大学入学選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」(2019年6月) p.1。

② 同上p.1。

③ 同上、別添「出題教科・科目の問題作成の方針」p.1。

④ 同上、別添p.1。

2021年度大学入学共通テスト世界史Bの全体的な傾向

ここでは、出題された時代や地域についてではなく、問題全体を通しての出題傾向について述べたい。大きな特徴として、試行調査をふまえたうえで、従来のセンター試験よりも資料を活用した問題が大幅に増加したことがあげられる。センター試験の時と比べて、第1日程では小問の数が2問(第2日程では3問)減少したものの、文献・絵画・写真・地図・表・グラフなどの資料や会話文が数多く用いられ、組み合わせ問題も多く出題されたことから、問題の分量は増加したといえる。資料を正確に読み取り、学習した知識と結びつけて解答する思考力を必要とする問題となったため、単純な暗記だけでは解くことができず、解答を導くための時間も増えた。一方、試行調査と異なった点は、複数の正解がある問題や、いわゆる連動式の問題が1つもなかった点である。全体として、センター試験から出題傾向が変わったことから、戸惑いを感じた受験生は少なくなかったのではないだろうか。

大学入学共通テスト世界史Bに向けての指導の視点

⑤大学入試センター「平成30年度試行調査(プレテスト)の問題作成における主な工夫・改善等について」、別添資料「【歴史】作問のねらいとする主な「思考力・判断力・表現力」についてのイメージ(素案)」(2018年11月)。

大学入試センターは、問題作成の方針として「作問のねらいとする主な「思考力・判断力・表現力」についてのイメージ」⑤を提示し、歴史科目については次の9つの力が示された。

- ・資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを類推することができる
- ・考察したことや構想した過程や結果を、理由や根拠に基づいてまとめることができる
- ・歴史的事象を時系列的にとらえることができる(時系列)
- ・資料から読み取った情報や習得した知識を活用して、歴史的事象の展開について考察することができる(推移や変化)
- ・複数の歴史的事象を比較して共通性や差異をとらえることができる(諸事象の比較)
- ・諸地域世界の接触や交流などが歴史的事象にどのように作用したのかを明らかにすることができる(事象相互のつながり)
- ・背景、原因、結果、影響に着目して歴史の諸事象相互の関連を明らかにすることができる(事象相互のつながり)
- ・歴史的事象の多面的・多角的な考察を通して、日本や世界の歴史の展開や歴史的な意味や意義をとらえることができる
- ・習得した歴史的概念を活用し、現代的課題に応用することができる

これらの観点は、今回の共通テストだけではなく、次年度以降の問題作成の際にも重視される可能性がある。この点もふまえて、今後の授業等で指導する際の視点について述べたい。

初めに、出題形式に関わりなく必要と考えられる指導の視点についてである。従来のセンター試験よりも読み取る文章や資料などの分量が多くなり、その内容が正答に結びつくことから、正確に読み取ることが必要になった。生徒に対しては、設問文だけではなく、資料の説明文にも目を通し、資料を正確に読み取るように指導することが考えられる。そのうえで、学習してきた歴史的事象の知識と組み合わせで正答を導かせることが基本となる。

つぎに、出題形式ごとに必要と考えられる指導の視点を5つあげたい。①時系列的にとらえる問題に対しては、歴史的事象の年代を理解させるとともに、各地域における国家・王朝などの変遷について年代順に整理させる視点／②推移や変化についての問題に対しては、表やグラフにおけるデータの推移や歴史的事象の時間的な流れおよび地域間の交流を重視する視点／③共通点や差異をとらえる問題に対しては、複数の資料から歴史の諸事象を比較し、その共通点や相違点をみつけ出す視点／④事象相互のつながりについての問題に対しては、歴史的事象がおこった原因・その事象が与えた影響・その後の変化について考えさせる視点／⑤歴史的事象を多面的・多角的に考察する問題に対しては、今回の出題でも数多く用いられた文献資料などを活用して、複数の歴史的事象を比較したり関連づけたりしながら

ら考察させる視点、の5つである。5点目の多面的・多角的に考察する問題の例をあげたい。第1日程の第1問の間4は、歴史家マルク＝ブロックが著した『歴史のための弁明——歴史家の仕事』の一節を正確に読み取り、ブロックが研究者に助言する際に前提としたと思われる歴史上のできごとを把握するとともに、文書資料についてのブロックの説明として正しいものを受験生に考察させる問題であった。また、第1日程の第3問の間8は、遼(契丹)から宋への亡命者の手紙の一節を正確に読み取り、手紙を改ざんした意図について受験生に考察させる問題であった。

以上の5点に加えて、今回の共通テストでは、会話文を用いた出題形式が第1日程では4カ所(第2日程では7カ所)みられた。先生と生徒との会話だけではなく、生徒同士や観光ガイドとの会話など様々であった。従来のセンター試験ではあまりみられなかった出題形式にも慣れるように指導する視点も必要である。私は授業において、これらの視点を意識して指導していくのがよいのではないかと考えている。

今回の出題では多くはみられなかったが、日本と世界との関わりという視点も大切である。この点については、『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』の世界史探究の目標にも、「世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解する」^⑥と示されていることから、今後に必要な視点でありつづけると考えられる。

⑥ 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』(東洋館出版社、2019年3月) p.273。

まとめ

今回の出題傾向や出題形式ごとの指導の視点から共通していえることは、2つある。1つは、問題に書かれている情報を正確に読み取ること。もう1つは、歴史的事象を正確に理解しておくことである。これらは、従来のセンター試験に向けての対策と同様であるが、思考力・判断力・表現力を発揮して解くことが求められる問題が重視されたことにより、その重要性が増したと考えられる。では、受験生が歴史的事象を正確に理解するためにもっとも有効なテキストが何かといえば、日頃から学習で使っている教科書にほかならない。教科書の用語だけではなく、文章の内容を正確に理解する習慣をつけることが最善と考えられる。そして、教科書にはない文献・絵画・写真・地図・表・グラフについては、図説などの副教材でおぎなうのがよいのではないだろうか。私自身もこの視点を基本に今後とも指導をしていきたいと考えている。

(はまの・ゆうすけ/東京都立竹早高等学校主任教諭)